

talk! talk! talk! フォトグラファー、モデル・東野翠れんさん



フォトグラファー、モデル 東野翠れんさん

ただただ好きで撮り続けてきた写真が世の中の目に留まり、求められるようにフォトグラファーとして活動を始めた東野翠れんさん。その傍らでモデルとしても活躍、その他雑誌の連載などをもち、肩書きにとらわれず自由に自己を表現している。今でも“自分はただの写真好き”だと語る翠れんさん。愛用のFMカメラの話、そして大好きな写真について話をたっぷりとうかがった。

プロフィール

ひがしの・すいれん。1983年、東京都生まれ。
骨董商の父とイスラエル人の母、妹の4人家族。15歳から写真を撮り始める。その作品が友人のフォトグラファー、HIROMIXの目に留まり、18歳から「H」や「ロッキンオン」などの雑誌で写真を撮るようになる。スピッツ、High-Lowsら日本を代表するミュージシャンのポートレートを手掛ける。その傍ら、モデルとしてもボーダフォンやカゴメのCFに出演し話題を呼び、「ku:nel」「spoon.」「mini」などの雑誌や写真集で活躍、現在「PS」「Lingkaran」「Girls」「プリクル」で連載中。フォトグラファー、モデルというくくりにとらわれず、自らがやりたいと思ったことを表現の場として選び活動を続けている。
モデルとして参加した写真集「アムール翠れん」（ホンマタカシ撮影/ブチグラハブリッシング）が現在発売中。また2月始めには自身初の写真集となる「Lumiere（ルミエール）」を発売。6年間撮り続けた写真をまとめ、書き下ろしの文章を添えて毎日の暮らしの光と影を描いている。

露出計の壊れたカメラで写真の楽しさを知った

写真を撮り始めたのはいつ頃からですか？

中学3年生のときに父が誕生日のプレゼントに一眼レフカメラを買ってくれて、それ以来撮り続けています。もともと写真に興味を持っていて、よく家に遊びに来ていた両親の知り合いの中に写真を撮っている人が結構いたので聞いてみると、「一眼レフがいいんじゃない？」って言われて。いいなあと思っていたら、父が古いものを扱う仕事をしているので骨董品の市場に出ているカメラを買っておいでくれたんです。

それがこのNikon FMですか？

いえ、実はそのカメラはなくなってしまったんです。タクシーか何かに置き忘れてしまったみたいで.....凄くショックでだいぶ探したんですが、なかなか見つからなくて新しいカメラを買ったんです。またマニュアルがいいなと思ってF3を買ったんですが、どうしても手に馴染まないというか、自分が撮った写真じゃないような感じがしてしまって。それで結局また同じFMを買ったんです。だからこのカメラは2台目のFMなんです。

買ってもらってからかなり使い込んでいたんですね。

買ってもらって本当に嬉しくてとにかくたくさん撮っていたんです。どうやって使うのかも分からないから露出ってなに？（？）ピントはこれで合っているの？”という感じだったんですけど、とりあえずたくさん撮ってみようと思って。これくらいの暗さで撮ったらどう写るのかって実験したりして、ゲームみたいな感覚でした。とにかく撮るのが楽しくて、学校で友達を撮ったり家でも妹や家族を撮ったり、いつでも持ち歩いて撮っていました.....じゃなくて、撮っています！ 今もかなり撮るんですよ、はい（笑）。

では、露出なども比較的スムーズに覚えられたのですか？

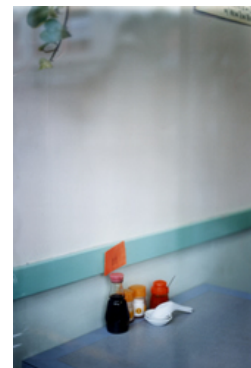
そうですね。でも1台目のFMを使っているとき露出計が壊れたんです。いきなり、真っ白な写真が出てくるようになってびっくりしたんですが、逆にそれが面白いと思ったんです。固定観念みたいなものが取れて、「そうか、写真ってなんでもいいんだ」と思った。そこからちょっと調節して真っ白の中にちょっと写るようにしてみようとか、偶然ピンクになって写ったりとか、こんな偶然も撮れるんだな、この感じがいいな、楽しいなと思ったんです。

壊れたカメラで写真の面白さに気づいたんですね。

はい。そのカメラでいろいろ遊びました。だからF3を買ったときに急にピシッとカッコいい写真が撮れてしまって“なんだろう？ 何か違うな？”って違和感が出てきてしまったんです。だいぶ前ですけど、白っぽく写ってかわいいなと思った写真を引き伸ばそうと思って写真屋さんを持っていったら、写真屋のおじさんに「おまえさん、この写真は露出が間違ってる。これは写真じゃないから焼けないよ」って怒って焼いてくれなかったことがあったんです。おじさんはプロだから、ちゃんと写っているものを焼きたいんだと思って諦めたんですが、これが好きなんですって言うてもちっとも伝わらなかった（笑）。お客さんなのにひどいなあと思いながら。

たとえば学校や本などで教えている“カメラの撮り方”からすれば、露出オーバーは失敗写真ということになるのかもしれないですね。

そうですね。それはわかるんですけど、でもその失敗も面白くて好きなんです。なんでこんなのが出てくるの!?”って。だから思った通りにちゃんと撮れたときより意外な写真に“よし！”みたいなところがあるかもしれないです（笑）。



「おしょう油差し」

「フォトグラファーではなく“ただの写真好き”です」

フォトグラファーとして活躍されるようになったのはいつ頃からですか？

高校3年生のときに初めて仕事をしたんです。もともとひろみちゃん.....HIROMIXとよく遊んでいたんです。私が写真が好きで撮っていることを知っていたので「ちょっと見せて」って言われて。見せるなんてほどの写真じゃないなと思っていたんですが、何

となく好きな写真をアルバムにして持っていたので見せたら「いいね、いいね！」って言ってきて。編集の人に見せてみようって言われたのですが、まだ学生だし、写真の仕事をしたとも思わなかったので断っていたんです。でもある日ひろみちゃんに「今日写真持って来て」って言われて持って行ったらそれが仕事の打ち合わせの現場で、編集の人に見ていただくことになって。それがきっかけで電話が掛かって来て、最初は音楽雑誌の「ロッキングオンジャパン」で写真を撮ることになったんです。

撮影してみてもいいですか？

不思議でしたね。いわゆるプロではないし、“私でもいいかな？”と思って。自分がモデルとして出ていくのを見ても何とも思わないんですが、フォトグラファーとして名前が載っていると変な責任みたいなものを感じたりして、“あれ？”って、変な感じでした。

ライティングなどは勉強したのですか？

いえ、そういうスタジオでの撮影ではなく公園かどこかで、普段撮っているのと近い感覚で撮影するものでした。専門的な撮影の技術は今も分からないですし、そういう写真だったら私には頼んでこないと思います。

なんというか、今でも自分がフォトグラファーという意識がまるでないんですよ。もちろん仕事としてやっているわけで、責任から逃げたいというわけではないんです。ただ、そう言われることにしっくりこないというか.....。

「私はフォトグラファーです」とは言えない？

はい。仕事として写真を撮ることと今までは違う視点でモノを見ることができたとし、誰かと一緒に仕事をする楽しさも分かってそれは凄くよかったなと思うんです。

でも、写真を撮るのが好きという気持ちは仕事をしていなかった頃も今も全く変わっていないんです。本当のことを言うと、別に写真の仕事をしたくて撮ってきたわけではないから、写真の仕事をしていなくても、それはそれでいつでも変わらず写真を撮り続けていたと思います。もちろん仕事として撮るのも好きなんですけど、フォトグラファーというものに固執したり、これ一本でやって行くぞっていうことではないんです。だから私は、フォトグラファーではなくただの写真好きなんだと思います（笑）。



モノを作る楽しさを教えてくれた人たちとの出会い

モデルの仕事はいつ頃から始めたのですか？

最初は、中学生のときに通っていた美容院の美容師さんに声をかけられて雑誌の撮影に参加させてもらったんです。もともとモデルもあまり興味がなかったんですが、その美容師さんが好きだったので遊びのような感覚でたまにやるぐらいだったんです。でも原宿を歩いているときにひろみちゃんに偶然声をかけられて、「ファッション雑誌でモデルをやらない？」って言われて。その仕事をきっかけにモデルとしてよく声を掛けていただくようになったんです。

モデルにもともと興味がなかったのですか？

そうですね。モデルというイメージが凄く“メディアに出てる”という感じがして、雑誌に出ることが自分にとっていいことなんだろうとか、いい影響を与えるんだろうかって考えてしまって。結果的にひろみちゃんに声を掛けられたことが良かったんだと思います。彼女となら何か面白いことが始まりそうな予感を感じて、それまで躊躇していたけれどやってみたら凄く楽しかった。

HIROMIXさんとの出会いはとても大きなものだったんですね。

そうですね。不思議ですけど、人との出会いにはこれまで本当に恵まれてきたなあと思います。その人たちがなしではやって来れなかったと思うし、やる気もなくなっていたんじゃないかな。

私は、仕事だからといって自分の表現を変えたり無理したりすることがあまり得意ではないんです。たとえば必要のないところで無理にポーズをつけて撮影しなくちゃいけないとか、ポーズをたくさんしてと言われても、だったらもっとカッコ良くできる人に頼めばいいのになと思うし。でも、これまでそういうことはほとんどなかったんです。ありがたいことに、私の“楽しいな”“面白いな”という気持ちを表現できる仕事が多くて、それは周りの人に本当に恵まれているんだなと思います。

学校を卒業されてからは事務所などに所属せず、フリーという形でモデル、フォトグラファーといろいろな活動をされているんですね。

はい。フォトグラファーもそうなんですが、モデルもやりたくてやりたくてという感じでもなかったし、今も執着心があるわけではないんです。でも、高校生のときにそういう出会いがあって、写真にしろ雑誌にしろ、何かみんなモノを作るということは凄く楽しかったし好きになりました。

本当は、高校を卒業してから写真の専門学校や大学に行こうかと思っている探したんです。でもどの大学もしっくりこないし、写真の専門学校に行って今まで自由に撮っていたものが型にはまってしまうかもしれないと思うと恐かったです。だったらモノを作る楽しさを追求したいというか、社会勉強のような気持ちでこの仕事を続けてみようと思って今に至るという感じですね。



「アリスと真珠」



「シャネルと妹」



「オランダ/光」



「砂とあしあと」

カメラを向け続けた数年間か込められた 初の写真集「Lumiere」

先日初の写真集が発売されたそうですね。

はい、これまで撮った写真をまとめて、それに自分で文章を書き添えました。

なぜ写真集を作ろうと思ったのですか？

湯川潮音ちゃんというアーティストのCDジャケット撮影で一緒に仕事をした方に写真集を作ってみないかと言われたんです。そのとき私も、今まで撮り続けたものが溜まってしまって、これは一度きちんとまとめないと先に進めなくなるなという気持ちがあったんです。整理しなくちゃと思いつつなかなかできないでいたので、自分のためにもいい機会になるんじゃないかと思って一緒に作ることにしました。

2週間もあればまとまる気がするなんてすっかり言ったものの、迷いに迷って結局1年ぐらいかかってようやくできたんです。あまりにも手間と時間をかけたので、やっとという思いよりもとうとう出たという感じなんです。寂しいし恐いし、もう出なくていいのって思うぐらい（笑）。

膨大な写真の中から掲載するものを選んでいくのは大変な作業なんですよね。

何かテーマを決めて選べば早くまとまるかなとも思ったんですが、無理矢理テーマを決めたら自分の感じとは違う方向に向かってしまったので、テーマを決めずに感覚だけをたよりに選んで流れを作りました。まずそれに数カ月かかって.....凄く大変な作業でしたよ。

タイトルの「Lumiere（ルミエール）」にはどのような思いが込められているのですか？

フランス語で“光”という意味です。日本語の“光”や英語で“ライト”というの意味が限定されてしまうと思うのですが、直接的な光のイメージではなくて、私が見ていたいものという気持ちを込めてつけました。

それから、この写真集は“流れ”だと思ったんです。映像みたいに絵が流れているというニュアンスが違うけれど、最初にカラーコピーで本の構成が出来上がったのを見たとき、私が5、6年撮ってきたものがこうしてこの1冊に、ひとつの流れになってまとまったんだなと凄く思って。本にならなくても、もうこのカラーコピーでいいって思ったぐらいうれしかったですね。

翠れんさんが撮り続けて来た、見続けて来た数年間がそのまま込められているんですね。

本当にそうだと思います。カメラは旅行にも仕事にもいつでもどこでも持って行ったし、家の中でも撮っていたし、私の生活の一部でしたから。

写真を撮り始めた頃のこと、今でもたまに思い出すことがあるんです。カメラのことなんて何もわからなかった頃、プリント代0円でできるからって近所の本屋さんでフィルムを出して（笑）、2日後ぐら子上がったものをワクワクしながら受け取って、帰り道にすぐ袋を空けて見ながら帰るんですね。そのときに、自分の写真を見てドキドキしたんです。自分の写真を見てちょっとドキドキしてうれしかったり興奮したりするようなこの感じを、これから先もずっと持てたらいいなって思っているんです。写真に限らず、モノ作りをする上で凄く大切な感覚なんじゃないかと思うし、この先もその気持ちを持てるような自分でありたいというか、そういうことをしていきたいと思います。



「Lumiere ルミエール」
（扶桑社、定価/1365円（税込））
東野翠れんさんが6年間撮り続けた
日々の写真と書き下ろしのテキストで
綴った初のフォトエッセイ

自分の気持ちに嘘をつかず 先へ先へとつなげて行きたい



翠れんさんにとってのカメラ、写真とはなんですか？

ご飯を食べるときに彩りがかわいいなと思ったら食べる前にまずカメラカメラって思ったり、朝起きて雪が降っていたら撮らなくちゃと思ったり.....さっきも言ったように生活の一部ではあると思うのですが、何かというはっきりした言葉は出てこないです。でも、たとえば絵を描くのが好きな子供は何も考えずにとにかく何か描いているでしょう？ それと似たような感じではないかと思うのですが.....

では、写真を撮る一番の面白さは何ですか？

一番の面白さ.....。目に見えているものを撮っているのに写真にすると違って出てくるところとか、ピントも露出も思い通りにはいかないところも面白かったし、ああしてみようとかこうしてみようとか考えたり、ちょっとしたことなんですけど.....。あの、何でしょうか、うーん。すみません、よく分かりません（笑）。

理屈で考えるより、撮ることがただ好きで楽しいというような感じなのですね（笑）。

そうなのかもしれないです。でも、ただ楽しく撮るというだけではなくて、写真は何かを写すものだから撮ることで何かを伝えていくべきなのかなとは思っています。たとえば戦場カメラマンはその現状を伝えるという目的があって撮っていて、写真というメディアを通して強い意志を伝えようとしている人もいますよね。戦争ということでもなくとも、今自分が生きている環境の中で疑問に思うことや何かを感じることで、それを写真で伝えることがもしできるのならば、私も伝えていくべきなのかなと.....

写真に何かメッセージを込めたいという思いがある？

できればいいと思うんです。何かはっきりとしたメッセージが撮れるかという、それは自分の写真ではないと思うので今はまだ撮れません。伝えたいこともはっきりしたものはないんです。でもせっかくだと生きているわけだから、楽しんだり悲しんだりするこの気持ちを持って撮る、写らなくてもそういう気持ちを込めて撮ることが大事だと思います。

これから先、どのように写真が変わっていくのが楽しみです。

はい。撮り始めた頃は自分が楽しければそれでよかったんです。人に写真を見せることにも興味がなかったし、モデルとして雑誌やCFに出ていてもどこか他人事のような感じでした。でも今は、私の写真が好きだと言ってくれたり、今の自分を認めてくれる人たちがいるんだってことが凄く大切なんだと思うようになったんです。何かを表現するときに私が役に立てるのならばうれしいなという気持ちも持つようになりました。

これから先、自分がどうなっていくのか全くわからないんです。わからないんですけど、そのときそのときの自分の気持ちに嘘をつかないで、かっこつけてないで正直にやれたらいいなと思うんです。そうすれば、次へ次へとつながって行けるんじゃないかなと思っています。

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.